



## 2022年度 TLP シンポジウム「研修で何を得るか」 報告書

挨拶のことば

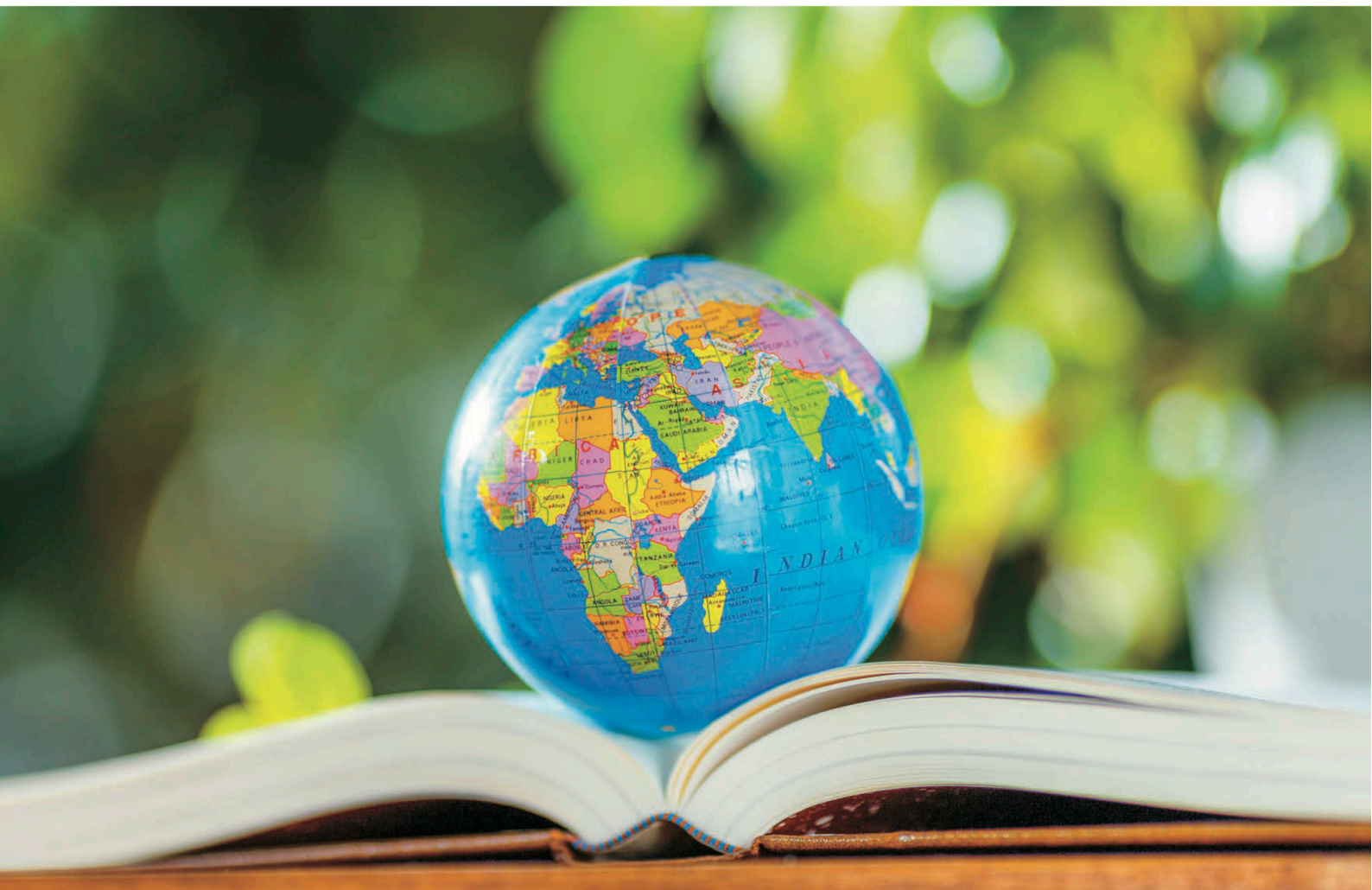
第1部 研修の軌跡

第2部 研修のさらなる飛躍を目指して

第3部 参加者が語る研修

まとめのことば

# 研修で何を得るか



日時：2023年2月17日(金) 17:00-20:00 開催形態：オンライン(zoom)

主催：東京大学教養学部附属グローバルコミュニケーション研究センター トライリンガル・プログラム

参加登録用フォーム



<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScjQOwJLjzeH7nk0tbJmQLUqU94ICR-r61yvjDl8CCKz6e5w/viewform>

## Program

開会の挨拶 森山工(教養学部学部長) 17:00-17:05

### 【第1部】 研修の軌跡 17:05-17:40

◆TLPによる研修を回顧する 寺田寅彦(TLP委員長)

◆研修の設計理念と構造 TLP運営委員

### 【第2部】 研修のさらなる飛躍を目指して 17:40-18:10

◆フィールドワークを中心とした体験型国際研修  
(日本及び米国におけるグローバルヘルス国際研修 実施の事例から)  
佐藤みどり(総合文化研究科附属国際交流センター)

～休憩～ 18:10-18:20

### 【第3部】 参加者が語る研修 18:20-19:25

〈中国語〉  
・西本 知貴(文科I類 2年)  
・星野 匠海(文科II類 2年)

〈ドイツ語〉  
・鈴木 隆三(文科I類 2年)  
・水田 真美(理科III類 2年)

〈フランス語〉  
・三好 陽子(文科I類 2年)  
・橘 幸作(理科III類 2年)

〈ロシア語〉  
・福田ゆい(理科II類 2年)

〈韓国朝鮮語〉  
・横川奏乃(地域文化研究分科韓国朝鮮研究コース 3年)  
・海老澤菜由莉(文科III類 1年)

〈スペイン語〉  
・玉岡空馬(文科I類 2年)  
・中村咲喜花(文科II類 2年)

〈国際研修〉  
・川島宗大(理科II類2年)  
・砂山佳音(理科II類2年)

全体討論と総括 吉川雅之(TLP運営委員) 19:25-19:55

閉会の挨拶 寺田寅彦 19:55-20:00

## 挨拶のことば

森山工

(教養学部学部長)

東京大学トライリンガル・プログラムのシンポジウム開催にあたり、ご来場・ご来聴いただいたみなさまに篤く御礼申し上げます。

トライリンガル・プログラム（TLP）は、英語の運用に一定の実力をもつ前期課程学生を対象にし、日本語および英語に加えて、もう一言語を集中的に学習する履修プログラムです。東京大学では既修外国語（多くの学生にとっては英語）のほか、初修外国語を学習することがカリキュラム上必須となっていますが、そのような教育体制の密度を集約的に高めるものとしてトライリンガル・プログラムは設置されました。

さらに、このプログラムは全学的なグローバルリーダー育成プログラム（GLP）の一環として位置づけられており、語学力の集中的な涵養がグローバルリーダーの育成とも結びつけられています。この意味でTLPは、東京大学憲章が謳う「世界的視野をもった市民的エリート」の育成に資するものであるといえます。

日本語と英語に加えてもう一言語を修得することで、わたしたちの視野はある変容をとげます。そこにおいては、言語もしくは文化の「三角測量」（川田順造）が可能となるからです。日本語と英語という二点間の比較を、他言語の導入による三点間の比較に変容させることには、視野を拡大するという量的な意味があるのみならず、視野を刷新するという質的な意味があります。しかもそれを、前期課程の時期に集中的になしとげることは、たんに学術的な能力の育成というだけでなく、学術を背景とした人格の陶冶に通ずるものであるといえます。

本シンポジウムによって、GLPの一環としてのTLPがどのような取り組みを、どのような構想のもとで実現してきたのかが明らかになるものと期待しています。それが、「世界的視野をもった市民的エリート」の育成にどのように貢献しているのか、そのアクチュアルな実相が示され、かつ理解されることを願って、わたしの挨拶とさせていただきます。



# 第 1 部 研修の軌跡

## 目 次

|                                   |          |
|-----------------------------------|----------|
| <b>研修の設計理念と構造（TLP 運営委員）</b> ..... | <b>4</b> |
| TLP 中国語の研修（吉川雅之） .....            | 4        |
| TLP ドイツ語の研修（竹峰義和） .....           | 5        |
| TLP フランス語の研修（寺田寅彦） .....          | 6        |
| TLP ロシア語の研修（鳥山祐介） .....           | 7        |
| TLP 韓国朝鮮語の研修（三ツ井崇） .....          | 8        |
| TLP スペイン語の研修（受田宏之） .....          | 9        |

# TLP 中国語の研修

吉川雅之

TLP 中国語では、現在「南京研修」「北京研修」「台湾研修」という3つの研修を行っています。三者は目的、内容、歴史ともに異なっているため、TLP 中国語履修者は自身のニーズに合った研修を選べるようになってきている点が強みです。

南京研修（南京サマースクール）は2年生を対象として8月に実施しています。研修期間は約2週間です。TLP 中国語の研修として最も歴史が長く、2014年度にTLP 生専用の研修として始まりました。但し、その前年度である2013年度には、TLP ではなく中国語中級履修者を対象とした全学自由研究ゼミナールとして既に試行されています。現在では「国際研修」科目になっており、非TLP 生にも開放されています。参加学生数は12～20名です。大学間協定に基づいて、南京大学海外教育学院に現地での教育指導を依頼し、同大学外国語学院とも交流しています。主な活動内容は、午前中4時間の中国語学習と午後の文化体験です。

北京研修は9月から1月にかけて実施しています。研修期間は約1週間です。2014年度に当時存在していた後期TLP を対象として始まりました。その後、2019年度からはLAP が主催者となっています。現在では「後期国際研修」科目になっており、駒場キャンパスの学生に限らず、本郷キャンパスの学部にも所属する学生も毎年参加しています。参加学生数は6～10名です。本研修は、中国人民大学文学院との部局間協定に基づいて行われています。主な活動内容は、上級中国語研修、大学・博物館・雑誌社の訪問、文学・文芸講座、資料調査、インタビューです。

台湾研修はTLP1年生を対象として2月から3月にかけて実施しています。研修期間は約1週間です。2017年度に始まり、現在では「国際研修」科目になっています。参加学生数は10～12名でしたが、2021年度は25名、2022年度は約30名と増えました。訪問先は台湾の大学や民間団体で、2019年度は九州大学と合同で開催しました。コロナ禍の2021年度は国内研修という形態をとり、山口県で開催しました。主な活動内容は、台湾の大学生との交流、交流協会・基金・シンクタンク・NGO での社会問題や経済問題に関する講義やフィールドワークです。

語学研修に重点が置かれた南京研修、文化体験や調査を切り口とする北京研修、学生交流や社会見学の性格が強い台湾研修。得られるものはそれぞれ異なるわけですが、いずれも貴重な「学び」機会として、TLP 中国語を履修する魅力となっています。

# TLP ドイツ語の研修

竹峰義和

TLP ドイツ語では、「〈ドイツ語を学ぶ〉から〈ドイツ語で学ぶ〉へ」というスローガンのもと、実践的・総合的なドイツ語能力の涵養を目指して授業および課外活動を展開してきた。毎年夏と春にドイツで実施している国際研修は、〈ドイツ語で学ぶ〉という段階への橋渡しをするものとして位置づけられる。研修では、ドイツ語の集中的な訓練を行なう一方、現地学生との交流会や共同ワークショップ、講演会、領事館訪問といった多彩なプログラムをつうじて、TLP で学んだドイツ語を実際に活用する機会をできるだけ多く提供するよう努めている。2020 年春以降、コロナウィルスの感染拡大により、しばらくはドイツでの研修ができない時期が続いたが、そのあいだも国内でのオンラインによる代替研修を年2回実施することをつうじて、途切れることなく学生に国際的な経験を積ませることを心掛けた。また、代替研修にあっても、学生自身の能動的な学びを促すとともに、学生の学習意欲を維持させる工夫をこらした。たとえば 2022 年度は、ハンブルク市の後援のもと、春の国内での代替研修と夏のハンブルクでの短期国際研修とを連動させたプログラムを実施した。すなわち、研修参加者を4つのグループに分けたうえで、まずは春の代替研修において東京とハンブルクを主題にしたドイツ語の動画をそれぞれ作成させた。5 月には、作成した動画をドイツ大使やハンブルク市の関係者たちのまえで上映イベントを実施した。つづいて、夏の国際研修ではハンブルク市を訪問し、動画制作をつうじて得られた知識を実際に現地で確認、体験する機会となった。参加者からは、代替研修であってもドイツ人学生との交流の機会がもっと欲しかったという声が出るなど、幾つかの反省点も残ったが、オンラインでの教育・研修のノウハウが蓄積できたことは、今後の TLP ドイツ語の活動にさまざまなかたちで活かすことができると考えている。

2023 年度以降は、3 月にケルンで、8 月にミュンヘンで国際研修を行っていくことを計画している。学生にとって国際研修は、ドイツ語・英語を通じて多様な人々とコミュニケーションをとるとともに、ドイツの文化・生活・歴史を肌で感じる機会となるという点で、将来において国際的な視野で思考し、活躍していくにあたっての貴重な財産となるだろう。TLP ドイツ語のプログラム生にいっそう豊かな国際経験を積ませるべく、国際研修をますます充実したものになるよう努力していきたい。

# TLP フランス語の研修

寺田寅彦

TLP フランス語では、国内研修やオンライン研修を行ったコロナ禍の時期を除いて、年に2回の海外研修を毎年実施しています。夏季研修は夏休み（主に9月）に2年生を対象として、春季研修は春休み（主に2月）に1年生を対象として行われます。全行程に付添教員が付き、出発から帰国まで安全な研修が実施されています。

春季研修では、フランスの大学生との交流や、研究機関・省庁での発表を通じて、社会生活・研究・行政といった幅広い場面でフランス語を使う機会が設けられています。大学生との交流では、交歓会だけではなく同じテーマでの発表やディベートを行います。日本語を学ぶ学生との交流では、日仏両言語を駆使しながら現地で発表を作り上げることで、日本語そのものに多角的な視野を持てるようにしています。一方で、研究所や省庁などで高いキャリアを持つ研究者や行政官と対話を行うことで、質の高い言語を用いることの重要性を感じられるようにしています。また、地方都市のリヨン、あるいはベルギーのブリュッセルでも交流事業を行い、学生が多様なフランス語の世界を楽しめるような研修になっています。

夏季研修は、フランスの地方都市のアンジェで行われる語学研修です。2週間程度のフランス語のインテンシヴ指導を受け、世界各国から集う学生たちと交流を持ちます。週末にはエクスカションが企画されます。年によって行先は異なりますが、モンサンミッシェルのような地方の名所を見学することが多いです。また滞在中はホームステイを行うことで、フランスの生活に浸りきりになる研修となっています。滞在先の家族とのあたたかい交流は、研修に参加する学生にとって最良の思い出のひとつです。

フランス語の運用能力を高めるだけでなく、フランス語の世界とその文化を知り、なによりも多様な視野を持つことができるような研修が行われています。



# TLP ロシア語の研修

鳥山祐介

TLP ロシア語では、2019 年度まで毎年 9 月にロシアのサンクトペテルブルク大学で研修を行っていました。私自身はその年の 4 月に東大に赴任したのでその準備と実施の一端に少し触れただけですが、長きにわたってロシア文化の中心であったこの町での研修は充実したものであったと理解しております。

コロナ禍が始まって以降、2020 年度、2021 年度には同じサンクトペテルブルク大学が提供するオンライン研修という形で、いずれも 2 月に研修を行いました。2 度目のオンライン研修の終盤であった 2022 年 2 月 24 日、ロシアがウクライナへの侵攻を開始しました。その直後に当初より予定されていた現地の学生とのオンライン交流イベントが行われたことは、TLP 生にとっても貴重な経験であったと考えております。

2022 年度には、多くの言語でこれまで通りの対面研修を復活させる動きが出てきてきましたが、TLP ロシア語はロシアのウクライナ侵攻によりコロナとはまた別の課題を抱えることとなりました。ロシア以外でロシア語を学べる受け入れ先を探すのに時間がかかったため従来通りの夏の実施はいったん見送り、慎重に検討を重ねた結果、修了式後の 2 月にアルメニア共和国のイェレヴァン大学で行うことに決定しました。歴史的経緯からロシア語教育体制が整っていること、この土地自体の独自の魅力ということに加え、駒場にはこの地域と関係の深い教員もおり、知的側面と実際の側面の両方で準備・サポート体制が整っていることがその理由となりました。

この研修は現在（2023 年 2 月）、準備の大詰めを迎えており、来る 2 月 25 日から 3 月 11 日まで行われます。プログラムにはロシア語の学習はもちろんのこと、学生交流の機会、またアルメニア文化について学ぶ機会も用意され、刺激的な研修となることが予想されます。もともと、今回こうした形で研修の実施が可能になったのは、歴史的に見ればロシアという国の覇権志向の余波でもあります。ロシアの近隣国でロシア語を学ぶこと、またロシアというフィルターを通して近隣の文化を学ぶことは、もちろん有益であります。一方で複雑な背景を負った状況であることも確かです。折しもロシアという国がかつてと変わらない問題を抱えていることがこの上なく明らかになっている最中ではありますが、参加者の皆さんにはロシア語の習熟に加え、国家とは、文化とは、言語とは、といったことを改めて考える機会になればとも思っております。

# TLP 韓国朝鮮語の研修

三ツ井崇

TLP 韓国朝鮮語は 2018 年度に発足し、国際研修も同年度に開始された。2018～19 年度には「ソウル大学校韓国語研修サマープログラム」が開講された。これは、TLP2 年生及び韓国朝鮮語中級履修以上の教養学部生を対象とし、夏季休業中の 3 週間、語学研修を行うもので、その内容は、通常授業（1 回 4 時間を 15 回（毎週 5 回）、合計 60 時間）、アクティブ・ラーニング（全 8 回、合計 32 時間）、文化体験（2 回）、公演観覧（1 回）からなるものであった。しかし、この 2 回のサマープログラムは、TLP 生の参加がなく（TLP 生以外の参加は若干名存在した）、TLP 国際研修としての実績を作ることはできなかった。

もっとも、年を追うごとに TLP 生においても同サマープログラムに対する関心が高まっていった。2020 年度以降は少しずつ TLP 生の参加も見込まれたが、折悪しく、新型コロナウイルス感染症拡大という事態になり、2020 年度は中止という判断を余儀なくされた。

新型コロナウイルス感染症拡大の状況は 2021 年度になってもおさまらず、国内型研修プログラムへと切り替えた。2020～21 年度は A セメスターに代替プログラムとして、「グローバル化のなかの日本と韓国朝鮮」（2020 年度）／「グローバル化のなかの韓国朝鮮と日本」（2021 年度）を開講した。これらの研修は、TLP 生及び韓国朝鮮語中級履修以上の学部生を対象とし、(1) 韓国朝鮮語部会教員およびゲストスピーカーによる言語、文学、歴史、社会、政治、文化など多様な分野の講義を通常授業の形で行うもので、(2) 韓国朝鮮関連施設見学(2 回)、(3) 韓国人学生との交流とグループワークから構成された。(1) は東京大学教養学部の韓国朝鮮語関連教員のリソースを十二分に活用し、総合的な韓国朝鮮学を提示する良い機会となった。(2) では、東京にある韓国朝鮮関連施設を訪れ、直接文化や歴史に触れる良いきっかけとなった。(3) では、グループワークを通して、韓国朝鮮に関する学生の主体的な学びの機会が生まれた。

2023 年度は、新型コロナウイルス感染症をめぐる状況が大きく変化し、「ソウル大学校韓国語研修サマープログラム」を復活することになる。TLP 韓国朝鮮語生の参加も見られ、ようやく TLP 国際研修としての実績を作ることができるようになった。

# TLP スペイン語の研修

受田宏之

スペイン語 TLP では、これまでに 3 回の海外研修を夏休みに行ってきました。いずれも対象国はメキシコで、第一回（2020 年）と第二回（2021 年）はオンラインで、第三回（2022 年）は対面で実施しています。スペイン語は多くの国々で話されており、様々な選択肢がある中でなぜメキシコなのかといいますと、スペイン語 TLP を支えるネイティブ教員（サンブラーノ先生）がベネズエラ出身ながらメキシコと深いつながりがあるほか、TLP 委員だった私がメキシコをフィールドとしていて過去に国際研修の枠組でメキシコ研修を企画したことによります。

メキシコの魅力は、何よりもその豊かな歴史、多様な文化にあります。格差の大きさや治安の悪さ等、課題を挙げればきりがありませんが、メキシコ人とメキシコ社会の懐の深さは、研修に参加した TLP 二年生も感じ取ってくれたようです。オンライン研修でも対面研修でも、協定校 UNAM（メキシコ国立自治大学）の定評ある外国人向け語学学校で 1 週間、密度の濃い授業（「上級スペイン語文法」と「メキシコ文化論」）を受講しています。授業に臨む姿勢と咀嚼力、および UNAM の日本語履修生との交流で参加学生が入念に準備したスペイン語でのプレゼンをみたとき、TLP 生のポテンシャルの高さを改めて認識したものです。

それと同時に、対面での研修には、身体性を伴う経験ができること、および直にメキシコ人と触れ合えるというメリットがあることを痛感しました。初日から、唐辛子や果物の種類の豊富さから、タコスのような軽食、ハレのごちそう、さらにはでかくて甘いデザートまで、メキシコの豊かな食文化を堪能している学生の姿をみるのは喜ばしかったです。最終日に、2 つの協定校（UNAM およびメキシコ大学院大学（COLMEX））の学生と一緒に、グループに分かれてメキシコシティを散策したことは、よい思い出になっているようです。研修後もメキシコの学生と連絡を取り合っている学生もいるようですし、参加学生の間で会う機会も設けているようです。こうしたつながりの深さも、対面研修の成果といえるかもしれません。

現地の代理店と連携してホテルを予約しバスをチャーターしたことも手伝い、幸いにも犯罪に巻き込まれた学生はいませんでした。また、お腹を壊したり風邪をひく学生はいたものの、移動に支障のするような病気に罹る学生もいませんでした。今後も安全に細心の注意を払いつつ、スペイン語圏で貴重な体験をしてもらえればと考えています。



## 第2部 研修のさらなる飛躍を目指して

### フィールドスタディを中心とした体験型国際研修

— 日本・米国におけるグローバルヘルス国際研修の事例から —

佐藤みどり

本発表では、東京大学の国際研修授業の中で、アクティブラーニング手法、フィールド体験型学習やフィールドスタディなどを組み合わせて実施している事例を紹介した。

体験型学習 (Experiential Learning) は、1946年に Kurt Lewin らによる企業研修研究から生まれた手法であり、学習者が実際の体験を通じて知識・技能を習得するものであり<sup>1</sup>、アクティブ・ラーニング「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加の教授・学習法の総称<sup>2</sup>」の能動的な手法の一部とされている。

海外体験型学習には、キャリア形成、ボランティア体験、フィールド体験などの異なる目的があり、これらは期間やタイプによって分類される。(図1) 国際研修は、語学や文化習得を目的として実施される TLP 研修の他にフィールドスタディ、フィールド実習や演習などのテーマ型 (Thematic) プログラムが実施されている。原尻英樹 (2006<sup>3</sup>) によれば、

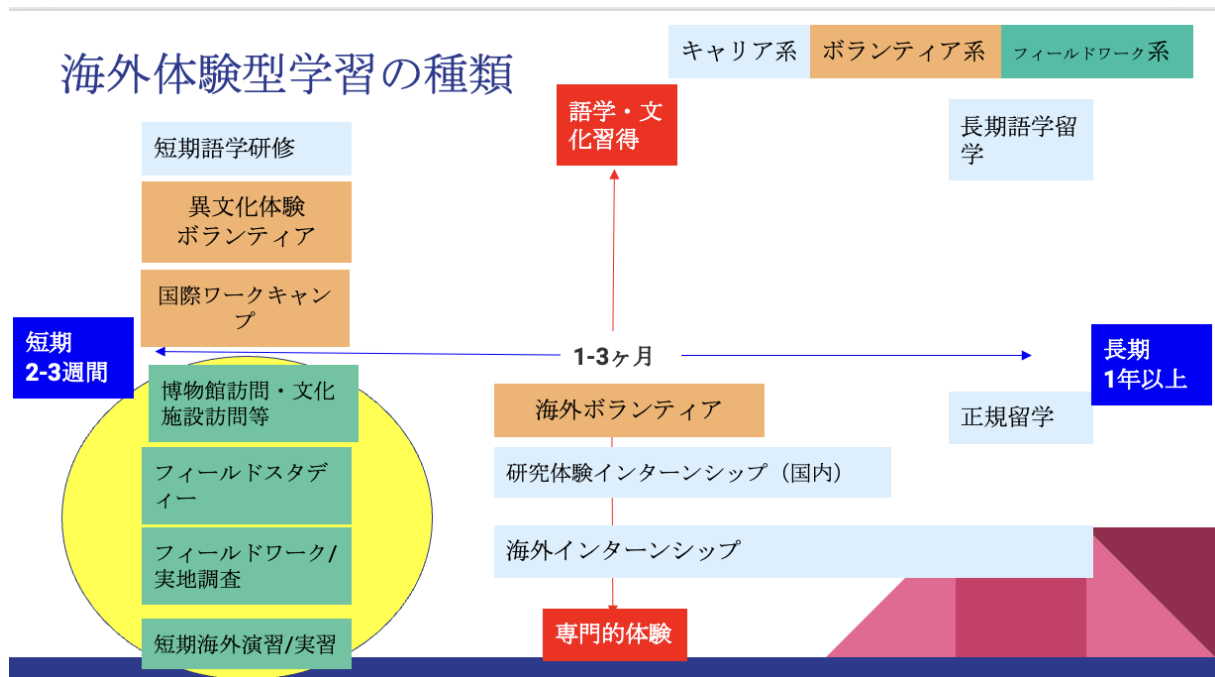
- フィールドワークは、フィールド (Field) で行う調査・研究 (Work) であり、異文化理解の方法・生活する人々の世界に入り文化を学習し他者を理解していく過程であり、主な手法として、観察、聞き取り調査、資料収集、分析などを挙げ文化人類学、生態学、社会学、公衆衛生など様々な分野にて活用されている。
- フィールドスタディは、学生の学びに焦点を当て、学生が人々の行動を観察した上でテーマや問題点を発見し、特定のテーマに基づきフィールドで調査や研究活動を行い、新たな提案を行う力を養うことを目的として実施される。

1 Luckmann, C. (1996): Defining experiential education, The Journal of Experiential Education, 19(1), 6-7, 114-125

2 中央教育審議会用語集, 2012

3 原尻英樹 (2006)「フィールドワーク教育入門ーコミュニケーション力の育成」玉川大学出版部

図 1: 海外体験型学習の種類



次に事例として、2022年S Semester、S2タームに連続で開講された「グローバルヘルス入門 Part1（日本）・Part 2（米国）」国際研修の事例を紹介した。

「グローバルヘルス入門」授業概要

本授業は、途上国のグローバルヘルス実務に深く関わった教員が知識と経験を共有し、一線で活躍する実務者から学ぶ場や機会を提供する。特に社会的弱者が直面する健康課題とその要因を正しく理解し、公平性の達成や国境を越えた取り組みについて知識を高め、志を同じくする人々の輪を東大内に広げることを目指している。通常授業には、教養学部生だけでなく、他学部生、院生、留学生、日本人学生など多様な背景を持つ学生が参加し、参加者は英語で調査、議論を進めることにより、視野を広げ、組織横断的に1つの課題に取り組むという体験を積む。また、博士課程生TAのサポートを得て、将来の留学やキャリア形成に役立つよう、調査・研究や手法の手解き、海外の学生・教員との交流、キャリアアドバイジングなども行っている。授業の特徴は下記、表1の通り。

表1：グローバルヘルス入門・入門演習

|       |   |   |
|-------|---|---|
| 項目    | グローバルヘルス入門 Part1  | グローバルヘルス入門演習 Part2 米国   |
| 時期    | 2022年4-7月(週1回X13回)<br>フィールド実習2泊3日(岩手)   | 2022年9月1-18日<br>事前研修(オンデマンド聴講 Part1)<br>フィールドスタディ(2.5週間)  |
| 場所    | ハイブリッド(教室対面+オンライン+<br>フィールドスタディ)  | ハイブリッド(提携先大学対面+フィール<br>ドスタディ+オンライン講義)   |
| 履修者   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・19名(1-2年10名,3-4年8名)<br/>(博士TA2名)</li> <li>・58%女子 VS 42%男子</li> <li>・52.7%文系 VS 47.3%理系</li> <li>・9人留学生 VS 10人日本人学生</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・10名(1年2名,2年7名,4年1名)<br/>(博士TA1名)</li> <li>・50%女子 VS 50%男子</li> <li>・50%文系 VS 50%理系</li> <li>・10人日本人学生</li> </ul>  |
| 授業の目的 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. グローバルヘルスの疫学的、経済的、政治的、倫理的、歴史的、環境的、社会的、組織的な背景を分析し、これらの要因が人々の健康にいかに関与するかを説明する。</li> <li>2. グローバルヘルス分野の概念、理論、分析的枠組みについて理解する。</li> <li>3. 日本および自分の国、関心のある途上国の保健医療サービスの提供体制、ヘルスシステムの基本的な政策と人々を中心とした医療システム機能およびガバナンスの課題について説明ができる。</li> <li>4. グローバルヘルス課題に対処する、科学的根拠に基づくアプローチや介入の方法や効果を検証し、自分達が果たすべき役割を理解できる。</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. グローバルヘルス課題と国際保健分野の国際協力に関する実践的な知識とその応用力を身につける。</li> <li>2. 同分野の第一線で活躍する講師をゲストとして紹介し、学際的な研究・実務活動についての知識を深める。</li> <li>3. 現地大学(サンフランシスコ大学およびカリフォルニア大学バークレー校)の文化交流(授業、イベント、グループワークへの参加など)を行う。</li> <li>4. サンフランシスコ地域コミュニティにおけるフィールド訪問、実地踏査、フィールド調査により、健康格差の実態を学び、課題解決型プロジェクトに取り組む。</li> </ol> |
| 方法    | 講義、実務者との対話セミナー、特定の保健課題に基づいたケーススタディ、グループワークディスカッション、ワークショップ、課題解決プロジェクト、フィールド実地踏査、シャドウイング   | 講義、修士課程授業・グループワーク体験、課題解決型プロジェクト、実務機関訪問、現地踏査、フィールドスタディ   |

## 体験学習の理論とフレームワーク

授業は、講義やディスカッションなどに加えて、ケーススタディ分析、フィールドスタディ（課題に応じた現地踏査や調査を行う）を行い、コース全体を通じ「経験学習理論」（D.A. Kolb 1984）に基づく「経験学習のサイクル」<sup>4</sup>を中心にデザイン計画・実施されている。

1. 事前準備（事前講義や事前文献レビューなど）
2. 具体的経験（講義、フィールド訪問や実地踏査、地域の人々や地域のリソースパーソンや実務家等との対話）
3. 省察（日々の経験を振り返る会合や振り返りシートの活用）
4. 抽象概念化（対話、グループ討議を通して経験や観察した内容を概念化）
5. 積極的な実験と試行

例えば、入門（Part1）の岩手フィールドスタディでは、

- 1) 事前準備：岩手県藤沢町の国保藤沢病院長佐藤元美先生の講義を受け、フィールド踏査・見学の準備を行った。
- 2) 具体的経験：フィールドでは、デイサービス班、寺院班、公民館班の3つに分かれ、施設や公民館、お寺を訪問し、様々な活動に参加する中で、一人ひとりのニーズに合わせたケアを実際に視察・シャドウイングした。また社会との交流の場としての寺院やコミュニティセンターの役割、機能、財政的な支援の仕組みなどを学び、高齢者と直接議論する体験を得た。また、zoomによる訪問介護を実際に視察し、腎不全と心不全、脊髄損傷に苦しむ84歳の女性とその家族、そしてケアを提供する看護師と、個別対応の在宅医療を受ける患者さんと対話した。（写真1）
- 3) 省察セッション：サービスやケアについてのプレゼンテーションが行われ、ケースマネジメントの仕組み、救急医療、短期・長期医療の特徴、地域社会における病院の役割、多職種、縦横連携の重要性などについて整理し、フィールド体験で感じたこと、考えたことなどを自由に共有し、実務者との対話や質疑応答を行った。
- 4) 抽象概念化：最終日に全体振り返りを行い、チーム間での学びの整理と共有、教員による地域統括医療の課題と運営の方法について理論的な総括説明が行われた。

---

<sup>4</sup> Kolb, D. A.(1984)*Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*, Prentice Hall.



写真1：フィールドスタディの様子

## 岩手フィールドスタディ

訪問先：岩手県一関市藤沢町国民保険藤沢病院

目的：地域包括医療の現場で、医療・看護・福祉活動を行う実務者やサービスを受けている受益者の活動を一緒に体験し、観察、考察する



続く、グローバルヘルス入門演習（米国）では、学生は米国サンフランシスコで、大学（教室、図書館、食堂など）やコミュニティで、貧困層や、高齢者、LGBTQ+の方々やコミュニティを助ける地元の実務者やボランティア、サービスを受ける受益者と触れ合い、体験学習や講義などを通じて社会課題について学んだ。日々の省察は振り返りシート（その日に得た新しい学びについての根拠や説明、前日の省察を受けて、新たに挑戦してみたこと、その行動の結果、翌日以降学びたいこと）を活用して行い、教員と学生、学生同士の対話の中で、振り返りを共有し学びを深めた。

更に学生は、滞在1週目と2週目に、下記に示すそれぞれ異なる2つのフィールドスタディの課題を実施した。

### 課題1 Health of Chinese Immigrants in San Francisco City

5人1組のチームで、課題の進め方を決め、図書館等で文献調査を行い、質問票を作成、フィールド（チャイナタウンアメリカ中国歴史協会博物館）を訪れ、根拠となるデータ・証拠を収集する。

- 1) 1849年のカリフォルニア・ゴールドラッシュから1950年代までの間、SFCで中国人移民が直面した公衆衛生上のどのような問題があったか？
- 2) 中国系移民とその文化について、SFCの主流派や政府組織の人々の間ではどのような認識が支配的であったか？

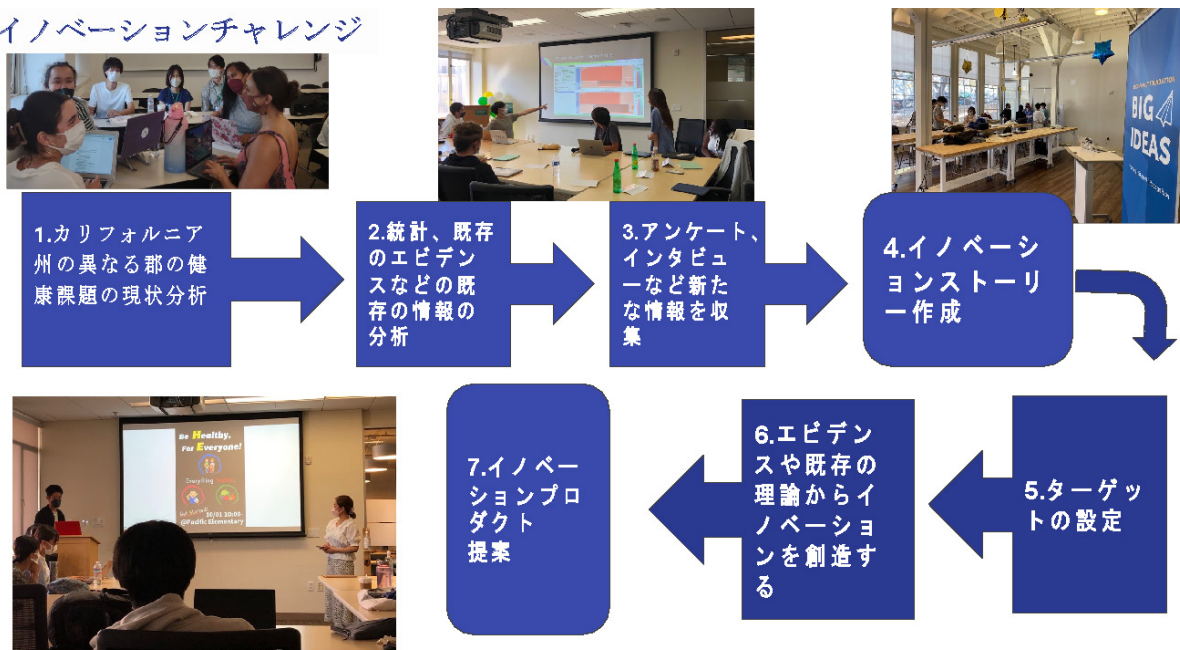
- 3) 政治的、社会的、文化的な要因や配慮は、支配的な人々のこれらの認識にどのように影響し、当時の SFC の公衆衛生当局がとった行動にどのように影響したか？
- 4) 港湾検疫はどこで行われ、実際にどのように行われたか？

## 課題2 Global Public Health Innovation Field Challenge

2人1組のチームが、割り当てられたサンフランシスコの、特定の郡における健康問題や課題について状況分析を行い、授業で学んだニーズアセスメントの方法とデータソースを参照し、誰のために、どの問題に取り組むか、足りない情報について一次・二次データを収集し、十分なサービスを受けていない集団のニーズを特定し、調査した結果を元にイノベーションのアイデアを検証し、バークレー大学での講義で学んだイノベーションプロジェクト手法に基づき、イノベーションの実施とスケールアップのための計画を提案する。このプロジェクトは最終日に発表が行われ、東京大学とサンフランシスコ大学の教員とTAにより評価が行われた。

写真 2：イノベーション課題

### イノベーションチャレンジ



最後に、授業終了後の学生アンケートや最終報告書から学生の声を紹介した。

- 体験型学習では、日々の振り返りシートが効果的であった。
- 普段できない体験や人との出会いや対話を通じて、複数の視点から物事を見る習慣や、見過ごしがちな要因にも目を向ける姿勢が養われる。
- 他者から聞いた噂や情報をもとに判断せず、社会的弱者自身と出会い、対話し、当事者意識を持って彼らの話に耳を傾けることが大切。

過去に実施されたグローバルヘルス入門国際研修（Part 1-3）の報告書は、Global Komaba の Web サイトに掲載されている。



## 第3部 参加者が語る研修

### 目次

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| <b>中国語</b> .....                  | 20 |
| 山口研修を振り返る（西本知貴） .....             | 20 |
| 中国語 TLP 研修について考えたこと（星野匠海） .....   | 21 |
| <b>ドイツ語</b> .....                 | 22 |
| TLP 生と留学生による多言語交流の可能性（鈴木隆三） ..... | 22 |
| ハンブルク研修(2021A&2022S)（水田真美） .....  | 23 |
| <b>フランス語</b> .....                | 24 |
| 研修で何を得るか（三好陽子） .....              | 24 |
| 海外研修での「想定外」の出来事（橘幸作） .....        | 25 |
| <b>ロシア語</b> .....                 | 26 |
| ロシア語研修へ期待すること（福田ゆい） .....         | 26 |
| <b>韓国朝鮮語</b> .....                | 27 |
| 国際研修の意義（横川奏乃） .....               | 27 |
| 国内で実施された国際研修を通じた学び（海老澤茉由莉） .....  | 28 |
| <b>スペイン語</b> .....                | 29 |
| メキシコ研修を終えて（玉岡空馬） .....            | 29 |
| 現地語が秘めている可能性（中村咲喜花） .....         | 30 |
| <b>国際研修</b> .....                 | 31 |
| 国際研修で得た学び（砂山佳音） .....             | 31 |

# 山口研修を振り返る

西本知貴

山口研修は、2022年の3月末に4日をかけて行われた。

中国語 TLP の研修先が山口であったのは、それが例年対面で行われる台湾研修の、コロナ期間における代替措置であったことによる。

山口研修の趣旨は、台湾とゆかりのある山口県の各所をまわることで、訪問がかなわなかった、1600 キロ離れた台湾へ想いを馳せるという企画であったと記憶している。

山口に向かう前の事前研修では、『台湾と山口をつなぐ旅』を題材にした講義があり、台湾と関係する現地の名所や施設を調べる課題があるなど、平時であれば目を向けることのない山口県について考える良い機会となった。

実際の研修には、約 30 名の TLP 生と阿古先生、TA の先生、九州大学の方々複数名、山口在住の台湾留学生の方々などが参加した。

萩市、山口市、周南市を中心に、炭鉱や石炭記念館、山口大学、松陰神社、日本ハワイ移民資料館などを巡った。

明治陸軍三傑の一人であった兒玉源太郎にちなんだ各所を巡る企画もあり、山口-台湾関係と明治・昭和日本の歴史を辿る奥深い研修だったと思う。

特に印象に残っているのは、兒玉源太郎研究者であり、元周南市長でもあった方のご講義である。ウクライナ戦争が始まったばかりの頃で、我々「若者」は日本を防衛する覚悟はあるのか、というある種山口県らしい質問を本気でぶつけられたのが印象深かった。

研修はまた、文系・理系 TLP 生の内部交流を促進した意味でも意義深い経験であった。

文理 TLP は2年春学期まで授業を共にすることはなく、毎期末のテストで同じ教室で気まぐれ無視し合うというまでだった。山口研修では共に時間を過ごす中で、仲を深めることができた。英語を達者に話すことのできる友人関係が文理横断的に広がったことは、多くの TLP 生にとって価値のある経験であったように思う。

心残りがあるとすれば、それは一度も中国語を目にする機会も話す機会もなかったことである。

社会見学・学生交流という側面があるというふうには理解できるものの、少しでも中国語に触れる機会があれば更に意義深い経験になったかなと振り返る。

しかしながら、山口研修は特例的に国内で開催された研修と理解している。コロナ規制の緩和に伴って、台湾研修再開は必至かと思いますが、私は山口県の研修も敢えてお勧めしたい。

今後の TLP の発展を祈念している。

# 中国語 TLP 研修について考えたこと

星野匠海

私は中国語 TLP の山口研修と南京研修に参加しました。その経験と、中国語 TLP の研修全体に対する所感を述べます。

山口研修は、コロナ禍の影響で例年の台湾研修が変更になったものです。事前の講義や山口県の各名所訪問を通して多くの学びがありましたが、この研修において最大の収穫だと私が感じるのは、同行されていた山口県にお住まいの台湾出身の方と Facebook を交換したことです。彼女は日本での日常を高頻度で Facebook に投稿されており、それを拝見することで 1 人の台湾人がどのように日本を見るのか、どのように考えるのかが読み取れます。外国人に差別的な態度をとる日本人の投稿などを見ると非常に考えさせられます。

南京研修は、オンラインで実施されました。南京大学の授業を受けながら国内の他の活動にも参加できるというメリットがありましたが、やはり身は日本に置いているので、肌で中国を感じたいという欲求は満たされませんでした。しかしだからこそ研修期間中は、中国人が集住する池袋で探索を行うなど、意識的に国内の中国要素を探しました。日中のつながりが身近にあることに気づくことができたのはオンライン開催の副産物だったと言えます。

私の代の中国語 TLP 研修ではいずれも現地に行くことはできませんでしたが、だからこそ、現地訪問への気持ちが募り、台湾旅行の計画や、これまでは考えていなかった中国留学の検討も始めています。また、研修はその場における学びが重要であると同時に、その後の学びのバネ台としての機能も重要であると思います。南京研修に参加したからこそ今も中国語学習が継続できていると私は思っています。どのような環境でも研修自体を行う価値はあると言えるでしょう。

ただ、中国語 TLP 研修にもったいなさを感じることもあります。コロナ禍以降の現象かもしれませんが、魅力的な研修に優秀な学生が惹きつけられていないと感じます。南京研修も参加者が少なく、残念に感じました。これは研修の内容に問題があるからではなく、学生がその魅力を十分に把握しないまま他の活動を優先しているためだと考えています。学生が自分から様々な活動を見つける、あるいは作り出す前に、先手先手で研修を紹介していく必要があると思います。特に、TLP 参加生に今後の研修やその魅力を、最初から、継続的に宣伝していくことでリテンション率を高めていけるのではないのでしょうか。

## TLP 生と留学生による多言語交流の可能性

鈴木隆三

私はドイツ語 TLP 生として、2022 年度夏のドイツ語語学研修に付随するプログラムであるドイツ人留学生との討論会に参加した。そこではネイティブのドイツ人と学生生活の悩みを共有したり、大学教育の問題点について議論したりして、よい国際交流の機会となったのだが、同時にある問題点も見られた。というのは、日本人学生に対してドイツ人が圧倒的に少なかったことである。討論会は二部にわたって行われたが、私の参加したテーブルについては、第一部はドイツ人二人に対し日本人四人、第二部に至っては日本人六人に対しドイツ人一人というありさまであり、ドイツ人にとっては極めてアウェーな環境だったに違いない。こうした状況が続けば、日本人学生がドイツ人の不足から不満を感じるだけでなく、ドイツ人学生の方も居心地の悪さから参加を躊躇うようになってしまい、将来的にはこのイベントそのものが破綻してしまう可能性がある。しかしだからといって、参加してくれるドイツ人留学生をこれ以上増やすのは難しいし、また日本人学生にのみ参加にあたり制限を設けるのも非現実的だろう。

この問題の解決策を考えるうえで、私は東工大のあるサークルの抱える問題を紹介したい。東工大には外国人留学生同士が交流するサークルがあり、そこでは日本語学習に関するイベントも行われている。しかし、それに日本人が参加することはめったにないようで、当事者たち自身も深刻な「日本人不足」を嘆いていた。一般に留学生は日本人学生とのコネクションを持たないのである。

ではこれら二つの問題を総合して解決策を考えてみるとどうなるか。ドイツ人だけに絞ると少ないように思えるが、実は「日本人と交流したいがどうすればできるのかわからない」という留学生は多い。この状況において「ドイツにこだわる」ことは本当に最善の選択なのだろうか。むしろ我々はそんな彼らを母語問わず討論会に招待し、すべての言語の TLP 生と様々な国からの留学生とでイベントを行えばよいのではないだろうか。そうすれば留学生たちのアウェー感は軽減されるし、また TLP 生の方も目標言語のネイティブスピーカーと交流しつつ、他の言語に興味を広げるきっかけを得ることができる。TLP 生同士の交友が生まれるという効用もあるだろう。TLP が「日本語と〇〇語」の二者関係だけでなく、多言語交流も促進する触媒となることを願っている。



# ハンブルク研修 (2021A&2022S)

水田真美

## ■研修の概要

当研修は、事前学習のビデオ作成から始まりました。2021年秋から約4ヶ月間、対面/オンライン併用でワークショップや撮影を行いました。夏の研修では、国内で語学研修を受講した後、実際にハンブルクを訪問しました。

## ■ビデオプロジェクト

「ハンブルク & 東京：ふたつの港湾都市 互いに学びあい、ともに学びあえることは何か?」というテーマで、グループ毎に約10分の動画を作成する課題に取り組みました。

私のグループは「学生がハンブルクと東京について調べたことを話しながら旅行計画を立てる」という動画を作りました。

2つの都市には、右下の3組の画像のように、よく似た観光地が存在します。私たちはそれらを調査し、横浜赤レンガを設計した人がドイツに留学していたこと、ハンブルクの魚市場と築地市場の双方に鉄道の痕跡が残っていることなど、意外な関連を発見しました。

完成した動画は、東京アメリカンクラブで、ドイツ大使館の方々等に向けて上映しました。また、ハンブルク訪問の際には、日本総領事館における、関係者との夕食会にお招きいただきました。これらは、私にとって国際的な社交の場に参加する初めての機会でした。

## ■改善に向けて

ビデオに使用した情報や写真はネットで調べたものであり、ビデオを見たドイツの方々はもともと日本とつながりのある方でした。現地の学生との共同プロジェクトを企画し、互いの都市についての情報を交換しながら1つの動画を作成する、あるいは互いの国に関する動画を作って発表し合えば、他国の同世代の人々との交流の機会にもなると思います。

## ■プロジェクトの良かった点

- 充実した事前学習のおかげでハンブルクの理解が深まり、現地に行った際により多くの学びを得られた
- ワークショップや上映会を通じて、プロジェクトに関わる様々な人と知り合えた
- コロナ禍で渡航の可否が不明の中、研修のモチベーション維持につながった



## 研修で何を得るか

三好陽子

東京大学教養学部文科一類2年法学部進学予定の三好陽子と申します。昨年度の夏にフランス西部の街、アンジェの大学で行われた2週間の国際研修の参加者として、TLP フランス語研修についての感想を共有させていただきます。

TLP 申請をするきっかけでもあったフランス渡航ですが、これは何事にも変えられない意義を有していたと断言できます。CIDEF と呼ばれるウェストカトリック大学では、TLP よりもより一般的な講義スタイルを受けることで多くの方が苦手意識を感じるリスニング能力を鍛えることができました。自分の伝えたいことを伝える力だけではなく、慣れないフランス語に瞬時に対応する力や耳を育ててくれたと思っています。それだけでは、もしかするとはるばるフランスにまで渡航する理由にはならないかもしれません。しかし、TLP フランス語の運営の皆様の働きで可能となったホームステイ、これが非常に有意義であったと思いました。朝の9時から16時までみっちり6コマ入った毎日だったわけなのですが、帰宅後から就寝の時間まで、ホストマザーのフランソワズとのフランス語での雑談は頭のありとあらゆる部分をフル回転させる必要がありました。フランス国内の政治の話、エリザベス女王の死去とフランスの人々の反応、フランスだけではなく、フランコフォンに住むホストホストマザーの娘のお話。これはカフェでコーヒーを注文するのは全く別のフランス語能力を要しました。その中でも、自分が言いたいことが彼女に伝わった際に得られる達成感や交流は非常にこれまで2年間の学習の積み重ねが功を奏する瞬間でした。

2021年度の入学式で教養学部長は世界との「部分的な繋がり」を想像する力の重要性についてお話していたと記憶しております。多様性が叫ばれる今のご時世の中、「多様性」や「グローバル」と言った言葉が一人歩きし、一体全体何が多様なのがわからなくなっているのではないのでしょうか。そんな中、自分が住んでいる地域から飛び出て異なる時間の流れの中で同じ時代を生きる人々との交流をすることはさまざまな境遇にある見知らぬ人々との「部分的な繋がっている」感覚を養うことができるのではないかと考えています。そのような機会を感染症により柔軟な対応が迫られる中、可能にしてくださった TLP フランス語運営及び TLP 運営の皆様がこの場を借りて感謝させていただきます。ありがとうございました。

## 海外研修での「想定外」の出来事

橘幸作

フランス・アンジェ市の CIDEF での TLP 海外研修は、海外旅行の経験すらなかった私にとって、文字どおりの初体験で「想定外」の出来事の連続だった。

中でも特筆すべき出来事は、研修先 CIDEF が用意してくれたホームステイ先の問題だった。ホームステイ先が決まってすぐに挨拶メールを出したがなかなか返事が来ないなど、出発前からその予感があった。「まあ、フランス人にはよくあることだよ」とのアドバイスもあり、「文化も違うし、そんなものかな」などと考えつつも、一抹の不安を抱いて出発した。

現地に到着すると、不安は見事に的中した。①あてがわれたのは屋根裏の雑居ベッド、②トイレトーパーは自前で用意、③トイレにはゴキブリ、階段には蛾の死骸、④シャワーはカーテンで仕切られた狭くて汚い一角、等々。

到着早々、連日、大学の事務室に押しかけて、精一杯の語彙を引っ張り出しながら必死で契約違反の主張と改善要求をする、といった散々な研修スタートとなった。しかし、これで実践的なフランス語力は一気に向上した！

一緒に行った TLP のクラスメートたちには、本当に助けられた。「あの人は以前も問題を起こした人らしい」との噂を聞いたクラスメートは、「私のところで幸作も受け入れてくれないか、ホストマザーと交渉してみる」とすぐに行動を起こしてくれた。日本からも、寺田先生が心配して、何度も激励のメールを送ってくれた。

このようなことがあっただけに、残りのフランスでの生活は、語学研修は勿論、課外活動や名所旧跡の観光なども含めて、余計に楽しさを実感できる日々となった。

以上を踏まえて一言——①学生の皆さんには、TLP 海外研修への参加をお薦めする一方で、②先生方には、過去の「事故物件」等の情報を整理してより安全安心なサポートをお願いしたい。Tout est bien qui finit bien !



(狭くて汚いシャワースペース)



交渉の結果



(研修を終えて帰路に)

## ロシア語研修へ期待すること

福田ゆい

こんばんは、ロシア語選択の理科二類2年福田ゆいです。

ロシア語研修はまだ行われていないので、この発表では、主に研修への期待について話したいと思います。

ロシア語研修に期待することの一つ目は語学力の向上です。研修では、今まで以上に多様なロシア語に触れ、言語の背景にある生活や文化を知ること、これまでじっくりこなかったこともより深く理解したり、より多くの人の考えに触れたりして、ロシア語上達の契機としたいと思います。専門家によると、同じロシア語を学ぶという行為でも、文化的なコンテキストによって全く異なる体験になるらしく、そこも意識してみたいと思います。

期待することの二つ目は、人との出会いです。私が TLP を履修するほどロシア語の学習に積極的であったのも、高校生の時にできた人生で初めてのロシア人の友達の影響です。期待する出会いのために、前向きな気持ちとできる限りの語学力を準備して臨みたいと思います。

三つ目に期待することは、文化に関する学びです。日常的なしきたりや人々の様子、街の雰囲気など、多くの新しいことを体験して、多くの学びがあるだろうと期待しています。そして、日常的な面だけでなく、研修で滞在するアルメニアの首都エレバンは、歴史的な町なので、より学問的な意味での文化を学ぶ機会も多いと考えられます。こうした機会を楽しみ、意義深いものにするため、重要事項については学習していこうと考え、色々調べています。知識を実感をもって身につけるとともに、自らを相対化する視点をもったり多様性に気づいたりする力も身につけたいです。

一方で、私が個人的に興味があり、レポートのテーマにする事柄は、アルメニアの自然です。アルメニアは高山地帯であり、自然環境の面で豊かな主題があるだろうと思います。おそらく自然・環境は研修のテーマとしてはあまり想定されていないと思いますが、研修でも色々な発見をしたり調べる手立てを見つけたりできればと期待しています。

この報告書原稿を書いている時点では、アルメニアでのロシア語研修を無事終えています。シンポジウムで発表した、研修への期待は実際に大いに達成でき、期待を超える経験や学び、成果もありました。特に、いくつかの社会問題や環境問題に気づき、非常に考えさせられるアルメニア社会の不思議な点も多く発見しました。その中には、自分の将来の道標を見つけるヒントになりそうなものもあります。

# 国際研修の意義

## 2021年度 A セメスター「国際研修」(国内型) について

横川奏乃

私からは、2021年度 A セメスター「国際研修」(国内型)(以下、本授業)に参加して感じた国際研修の意義について報告させていただく。

まず、本授業の概要に触れておく。本授業は「グローバル化のなかの日本と韓国朝鮮」というテーマで開講され、オムニバス形式のオンライン講義とグループでの調べ学習から成っていた。オンライン講義では言語、文学、歴史、社会、政治の分野における基礎知識に関する講義を受けた。グループワークでは最終発表に向けて調査と打ち合わせを重ね、私のグループは「政治から見たジェンダー問題：日本より積極的な韓国」というテーマで発表を行った。またフィールドワークとして、日本と朝鮮半島の歴史に関わる外部施設を見学する機会も与えられた。

本授業に参加して感じた国際研修の意義として、まず人脈の形成に役立ったことを挙げたい。本授業を通じて他コースの学生と知り合い、夏季休暇中に一緒に韓国旅行をすることができたり、その学生からの紹介がきっかけで、韓国朝鮮語の母語話者に定期的にスピーキングの練習に付き合ってもらえたりと、自分が専攻とする朝鮮半島地域研究分野での学習を進めていく上で、貴重な人脈を作ることができた。

また、フィールドワークでの経験が学習意欲の向上に繋がったと感じている。本授業では駐日本韓国 YMCA の「2・8独立宣言資料室」を見学させていただいたが、見学終了後に私が残って蔵書を見ていたところ、係の方が感銘を受けたようで、本をプレゼントしてくださることがあった。自分が学び続けたいと思っている分野で、初対面の人にも自分の熱意が伝わった経験が、その後の学習のモチベーションに繋がっている。

国際研修の3点目の意義は、以後の学習において基盤となる知識の獲得である。例えば本授業の言語学分野の講義では、日本語・韓国朝鮮語・英語の3言語を比較しながら、その類似点や相違点について学んだ。これは、韓国朝鮮語の傾向を念頭においた語学学習に繋がりが、学習の効率を高めてくれている。また先述の韓国旅行の際には、本授業の歴史学分野の講義やフィールドワークで身につけた前提知識が役に立ち、学びを深めることができた。

以上のように国際研修は、私が専攻分野の学習を進めていく上での、人脈とモチベーション、そして知識的な土台を与えてくれた。

# 国内で実施された国際研修を通じた学び

海老澤菜由莉

私はグローバル化の中の韓国朝鮮と日本をテーマにした国際研修を2022年度Aセメスターで受講しました。この主題科目を通して私が得たものは韓国文化の「言語面以外からの韓国朝鮮の多角的な視点からの知見」と「韓国人留学生との共同発表を通して得た異文化コミュニケーションの重要性」だ。

## I. 講義

韓国朝鮮に関して専門分野を有する先生の講義を通じて、多様な知見を得られた。私が最も印象に残ったのは現代社会・文化の視点から日韓の歌手・音楽文化に関する情報を詳細に解説してくださった山本浄邦さんの講義である。K-POPが韓国語学習のきっかけとなった私にとって、韓国映画・ドラマ・音楽などの大衆文化を学術的に考察していたのが新鮮だった。講義を通じて、今まではただの1ファンだった韓国の大衆文化に学術的な視点から見聞を深められたことはこの講義の特権だとありがたく思った。

また、パク先生の講義はいつものTLPの授業の発展版のようで、今まで不思議に思っていたことを深掘りできたり、他の韓国人のネイティブスピーカーの方と文を読む時間ではネイティブが日本語の語法に感じる些細な違和感を知ることができたりしたのが、興味深かった。李英蘭先生の授業では実際に統計や表現例を使用しながらの授業であった上に、最近使われている韓国語に触れる箇所もあったので、私はまだそのレベルには達していないが言語学習のモチベーションを提供してくださる貴重な機会となった。

II. 校外学習 校外学習では、認知していなかった日韓の歴史を知る上で欠かせない資料が保存されている施設を見学することができた。座学のみでは学べなかったことも施設の方からのお話を聞いたり、貴重な資料を拝見できたのはまたとない機会であった。

III. 最終発表はメンバー編成に変更が生じたり、調べにくい主題内容を選んでしまったりしたことによる行き詰まりが生じてしまったが、発表達成に向けて韓国人のイエウォンさんと計画的に調査を進められたのは非常に達成感があった。私のリサーチ能力が足りず、思うように比較対象となる資料を用意できなかつたり、わかりやすく、説得性のあるプレゼンテーションを準備できなかつたりしたのは悔しかったが、厳しい批評を先生方からいただけたのは非常に身になる経験となった。

## メキシコ研修を終えて

玉岡空馬

スペイン語 TLP として一年次より駒場キャンパスでスペイン語の学習を進めてきた我々であったが、2022年9月、その集大成としてメキシコにおいて2週間の研修を行った。語学学校での授業、現地学生との交流、文化的・歴史的価値のある名所巡りなど、大変充実した滞在であった。以下では異国の地、メキシコにおける滞在を通して私が実際に体験したことをいくつか記したいと思う。

まず初めに、生のスペイン語に触れたことである。駒場でのスペイン語学習では、ベネズエラやアルゼンチン出身のネイティブ教員による授業もあったが、あくまで教科書ベースの講義が多かった。教科書で学ぶ事項は主に文法や単語であり、会話表現と題された单元や講義でも扱われるのは文語的なお堅い表現が多かったりする。実際にメキシコの地に赴き現地の方々と会話をする中で、日本では聞いたこともないような表現に頻繁に触れることがあった。特にその中でも“¡Qué padre!”という表現が印象的であった。直訳すると「なんて父親だ!」という意味不明な表現であるが、ネイティブは「いいね!」という意味で用いる。このような現地に行っただけで初めて触れることができる表現に触れることができたのは貴重であった。



続いて、メキシコの食文化に触れた体験を話したい。Chiles en nogadaについてだ。これは左の写真のような食べ物の名称である。見た目からしてとてもカラフルであるが、その色に意味がある。私たちが滞在した期間はちょうど独立記念日直前で、記念日に因んだもので街が溢れていた。Chiles en nogada もその一つで、緑色の唐辛子、赤色のザクロ、白色のクリーム

ソースでメキシコの国旗を表している。もし私たちがメキシコに滞在する時期が異なっていたら一生知ることのなかった文化である。

以上の通り、短期間の滞在であったが、ここでは書ききれないほど多くの体験や気づきを得ることができ、メキシコやスペイン語についての理解や興味を深めることのできた研修であった。また縁があれば再びこの陽気な国を訪れたい。

## 現地語が秘めている可能性

中村咲喜花

メキシコで特に印象的だったエピソードが二つある。一つは市場にて、スペイン語しか話せない店員さんに英語しか話せない観光客の通訳を突然頼まれたこと。そしてもう一つは本屋にて、お金がないから本は買わずに本屋に通い詰めて英語を学んでいるという女性に「日本人?」と声を掛けられたこと。これらのエピソードからもわかるように、メキシコの方は想像以上にフレンドリーで、初対面でもよく話しかけてくれる。しかし、せっかくの機会に英語で返してしまうと会話はそれ以上続かない。現地語であるスペイン語で返答しなければ彼らとコミュニケーションを図ることは難しい。

今回、私たちは TLP でスペイン語を学んだ上で、メキシコに臨んだ。そのおかげで、ドライバーやスーパーの店員、小さい子供や高齢者など、英語ではなく現地語だからこそ接することができるご縁が想像以上にたくさんあることに気が付かされた。確かに英語が話せれば観光地には行けるし、学生やエリート層とは意思疎通を図ることができる。しかし、彼らがメキシコ社会全体を反映した存在であるとは考え難いし、大学関係者はオンラインの国際交流や会議などで、日本からでも接する機会があるかもしれない。だからこそ、せっかく現地に行けるのであれば、現地語でしかリーチできずオンラインでつながることも少ない、しかし確かにその場で生活を送っている方々の生の声を聞いてみたいと考えるようになった。

今回のメキシコ研修を通じ、私は現地の言葉を修得していくことが、訪問先の様々な立場の方々の立場の声を聞き、複雑な文化や気持ちの在り様に対する理解を深めるための大いなる可能性を秘めていることを学んだ。これからもスペイン語を学び続けるのはもちろんのこと、新たな言語に物怖じせず積極的に学んでいきたい。





# 国際研修で得た学び

## Introduction to Global Health in アメリカ

砂山佳音

国際研修の授業で、2022. 9/2-9/17 の 16 日間、アメリカのカリフォルニア州に属する、サンフランシスコ、バークレーを訪れた。前半 (9/2-10) はサンフランシスコ大学にて、Global Health の授業を履修した。後半 (9/11-17) は、バークレーに移動し UC Berkeley の見学を行った (元々、授業履修予定だったが、新型コロナウイルスの関係からなしとなる背景あり)。代わりに、フィールドワークや現地で働く日本人の方からお話を聞いた。NPO SF Village, The Openhouse + On Lok LGBT, UCSF 整形外科医局など、さまざまな分野の人から聞いたことは貴重な経験となった。

研修の最後には、Final Project に取り組んだ。グループごとに対象の地区が割り当てられ、現状分析の後ヘルスの分野に対する一つのプロジェクトを立ち上げるというものであった。ターゲットとする集団の絞り込み・アプローチ手法など、様々なことが学ぶことが出来た。

研修を通して学んだ意義としては2つある。1つ目は Global Health についての知識が深まったこと。アメリカの保険システムや現地の状況、生の声など、現地でしか得られないものは存在した。2つ目は、オフラインのよさの再実感。zoom の楽しさに慣れていた中で、16 日間、朝から晩まで一緒に過ごし、プロジェクトを1から作った達成感はひとしおで、参加生徒と仲が深まった。

強化できた能力と知識は、自分が普段関わらない人との接点が挙げられる。アメリカの学生、さまざまな人種・年代の人々、研究者や病院で働く医師、LGBTQ+ の方々など、多様性の町、サンフランシスコではさまざまな方と出会った。そこで、間接的に聞くのと、直接的に会って話すのは異なると強く実感したのを覚えている。偏見を抱くのはその人を直接知らないからであり、実際見たり会ったりすると印象が異なる、180 度変わる出来事は多く存在する。

そんな、多くの学びがあった国際研修であった。

最後に、この研修をコーディネートしてくださった、全ての方々に感謝申し上げたい。

## まとめのことば

寺田寅彦

(TLP 委員長)

地球は平らなのでしょうか。そしてその先には限界があって、世界はそこで終わっているのでしょうか。もちろん地球は丸いと今はだれもが知っていて、このような問いかけは意味がないように見えるかもしれませんが。しかし、世界に果てがあってそこから先には行くことができないという壁は、実はいまだ多くの人の心の中に立ちはだかっているのではないのでしょうか。

本学教養学部トライリンガル・プログラム (TLP) の 2022 年度シンポジウム「研修で何を  
得るか」は、多くの学生、教員、そして学外の方の関心を集めました。新型コロナウイルス感  
染対策のために、国際的な人の交流とモノの流通が著しく阻害された時期が続き、物理的に  
も心理的にも大きな壁ができてしまったことを多くの人が実感していたからかもしれません。し  
かし、そのような壁をものともせず世界の舞台で活躍しようとする人材が、TLP 研修をはじめと  
する本学部のさまざまな研修から育てていることを、このシンポジウムは明らかにしてくれました。

このシンポジウムは多くの関係者によって実現されました。シンポジウムに参加した学生・教  
員の皆さま、常日頃から TLP の活動を支えている GLP 推進室、本部教育・学生支援部学務課、  
国際交流センター、グローバルゼーションオフィス、国際研修、教養学部グローバルコミュニケー  
ション研究センターおよび事務室、教養学部等事務部に、とりわけ謝意を表します。そして、  
TLP を運営する TLP 委員の先生方、とくに本シンポジウムの開催を企画・運営した吉川雅之  
先生のご尽力にあらためて感謝申し上げます。

球体だからこそ生まれる多方向で多様な交流の実践の場が研修です。この無限の可能性  
がある世界でどうすれば力をぞんぶんに発揮できるかを、研修は教えてくれます。心の壁を取  
り払い、一步一步着実に、そして遠くに進んでいける若い力を、これからも TLP が育むことを  
期待します。





# Trilingual Program

©2022

東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部附属  
グローバルコミュニケーション研究センター  
Center for Global Communication Strategies  
Graduate School of Arts and Sciences  
College of Arts and Sciences  
The University of Tokyo

発行者：Trilingual Program TLP 委員会

デザイン：印藤直晃

発行日：2023年3月31日